

「時間のつくり方」について(3)

ーカール・ヒルティの幸福論よりー

今回は「十五分」の効果について考えて見ます。一般に仕事を持っている人に、空白の時間はありません。二十四時間何らかの行為で埋められており、初めから時間の余っている人はいないのです。だがこのままでは何も新しいことは始まりません。

五、小さい時間の断片を利用すること。

「多くの人は仕事に取りかかる前に、なにもにも妨げられない無限の時間の大平原を目の前に持ちたいと思うからこそ、彼等は時間を持たないのだ。」とヒルティは看破する。実際にそんな時間など期待することは無理だし、取りか

かってからもしばしば中断される。そこで例えば十五分という単位の時を拾い集めて仕事の準備をし、次に手にする幸運の一時間を仕事に集中する。この様に前の十五分を有効に使うには、その時点で優先順位の付いた小さな仕事の断片が用意されていなければならないし、その分類整理のために最初の十五分を使うことになるだろう。この最初の十五分をうまく利用しないと、次の十五分も生かすことが出来ず、結局一時間の塊も事前の準備が出来ていないため、目の

前を通りすぎるのを黙って見送るしかなくなる。

また十五分の間に考えた貴重なメモも、それが分類整理されていなければ、後で役に立たないし、その時になって分類整理していたのでは余分な時間を必要とする。現実にはこの段階ではもはや分類整理は為されない。

これでは息が詰まるという人もいるだろうが、気分を換える時間もある。この十五分を使えばよい。

現実には周りを見渡せば、何に使ったのか分からない十五分の時間の断片は、一日の中でも少なくはない。

「この小さい時間の断片の利用と、『今日は始めても無駄だ』という考えをすっかり取り除くことがある人の生涯の業績の半ばを形づくる」ことを真剣に考えれば、小さな十五分が大きな時間に見えてくる筈である。

六、時間節約のおもな方法の一つは、仕事の対象を変えることである。

これも以前「仕事の仕方」で触れたことですが、「仕事の変化はほとんど完全な休息と同様の効果がある。」しかしながらこのことは誰にも直ぐに休息にはなるもの

ではなく、訓練によって少しずつ慣らしていく必要がある。丁度『息を抜く』ことと『気を抜く』ことの違いに似ている。訓練されなければ、『息を抜く』ことと『気を抜く』ことが区別されない。その結果息抜きが気抜きになってしまつて、立て直しに手間がかかることがある。

例えば二つの仕事があり、何れも

今月の一言

「一利を興(おこ)すは一害を除くにしかず。一事を生(ふ)やすは一事を減らすにしかず。」

耶律楚材(ジンギスカンの宰相)

先の故郷創生とかで一億円のばらまきは、まさにこの言葉の好例でしょう。自治体によつては混乱と金銭感覚のマトを起こしただけ。或は本当に資金が必要な自治体にとつては何の役にも立たない額で、下策中の下策であつた。

身近な所では、職場の改善運動で次々と新しい策を実施しては尻切れとんぼで終わることがよくある。現状を認識せずに関連するマイナス要因を放置したまま新しい策を施しても効果は薄

いばかりか、場合によってはやらない方がましということもある。職場においては「変化」は必ずしも歓迎されるとは限らない。多くの場合、表では「改善」の必要性に同調しながらも、裏では「変化」に取り残されるのではないかと恐れている。その結果「皆で取り残されれば怖くない」とばかりに同調者を集めてしまふ。このことに答えなければ職場の改善運動は成功しない。



ある程度の猶予があるとき、ヒルティは「まず一つの仕事を仕上げから、次の仕事に取りかかる」とすることもある。私の経験では間違っている」という。もちろん十五分で終わるような仕事はさつさと片付けてしまえばよいのであつて、ここで言うのは何か月もかかるような仕事を中心にして、少し短かめのを絡ませられるようなやり方です。

だが若い人には、二つの仕事を与えてこなせるかどうか分からない以上、最初からそんな形で仕事を与えられることはない。といつてそのままでいつまでも練習ができない。そんなときは、一月ぐらいで出来ることを目処に自分でテーマを決めて、本来の仕事に並行させて練習をする。これだけでも無駄な時間が相当消えていくはず。そしてこれを二年も続ければ、驚くほどの集中力が身に付いていることに気付くでしょう。